

りんご病害

1 予報（3～4月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
黒星病	並	やや多	(1) 4月の気温はほぼ平年並の予報で、感染開始時期は平年並の見込み。 (2) 前年秋期の発生園地率は平年より高かった。(+) (3) 4月の気温、降水量はほぼ平年並の予報。(±)
モニリア病	—	並 (平年少発生)	(1) 前年の発生園地率は平年並だった。(±) (2) 4月の降水量は、ほぼ平年並の予報。(±)
腐らん病	—	並	(1) 前年の発生園地率は、平年並だった。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(—)：少発要因、(—)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【黒星病】

(1) 薬剤防除

ア 重点防除時期は「花蕾着色期」と「開花直前」であり、特に「花蕾着色期」の防除は必須である。

イ 防除薬剤は「花蕾着色期」にカナメフロアブル、「開花直前」にミギワ 20フロアブルを散布する。なお、これらの剤は降雨直後に散布する。

ウ 本病を対象としたDMI剤及びSDHI剤の使用は、耐性菌出現を回避するため開花直前までとする。

エ 散布ムラが無いように十分量を丁寧に散布する。

オ 苗木及び未結果樹も成木と同様に防除を徹底する。

(2) 耕種的防除

ア 本病の一次伝染源は前年の被害落葉上に生じる子のう胞子であるため、被害落葉は芽出前までに処分する。

イ 苗木を定植する際は、頂芽のりん片で越冬する可能性があるため、必ず頂部を切り返す。

【モニリア病】

(1) 雪融けの遅れ等、園地が湿っていると子実体の生育に好条件となる。常発園では消雪促進や排水対策、除草、落葉処分等を励行し、園地が早く乾くよう努める。

(2) 発芽期以降、まとまった降雨（目安は降水量の合計5mm以上）があると子実体が成熟し、その後に胞子飛散時期となる。感染は展葉3日後から10日間程度、降雨のたびに起こるため、降雨を意識した防除を行う。

(3) 防除は、花蕾着色期のDMI剤又はカナメフロアブルの散布を基本とするが、前年発生園では展葉3日後の葉ぐされ防除を併せて行う。

(4) 展葉3日後の葉ぐされ防除では、ストライド顆粒水和剤及びパスポート顆粒水和剤は降雨前に、ベフラン液剤25は降雨後に散布すると効果が高い。ネクスターフロアブル及びパレード15フロアブルは降雨前・後ともに効果が高い。

(5) 葉・花ぐされの発生が見られたら、見つけ次第摘み取り処分する。

【腐らん病】

(1) 発病や前年の病斑からの再進展は、3月頃から確認されるので、処理済みの病斑、切り口癒傷部、摘果痕や採果痕等を注意して観察し、早期発見に努める。本病は、発生樹及びその隣接樹に次年度も発生する傾向があるので、発病歴のある樹とその周辺も注意して観察する。

(2) 枝腐らんの早期発見に努め、見つけ次第剪除する。

(3) わい性樹の胴腐らんでは、側枝基部の発病が多いので、この部分をよく観察する（図1）。

(4) 胴腐らんは、病斑を見つけ次第、患部を残さず紡錘形に丁寧に削り取り、その上から本病に有効な薬剤を塗布する（図2、3）。

(5) 削り取った病患部や剪除した枝は、園地内に残さないよう処分を徹底する。

- (6) 剪定の切り口、日焼け、凍寒害、枝折れ等の外傷部には、トップジンMペースト又はバッチレート塗布する。トップジンMオイルペーストは、外傷部の癒合を阻害するので使用しない。
- (7) 多発園では、芽出前にトップジンM水和剤、ベンレート水和剤、ベフラン液剤25、または石灰硫黄合剤を散布する。できるだけ動噴で散布し、薬液が幹にも十分付着するようにする。



図1 わい性樹における主な胴腐らの発病部位

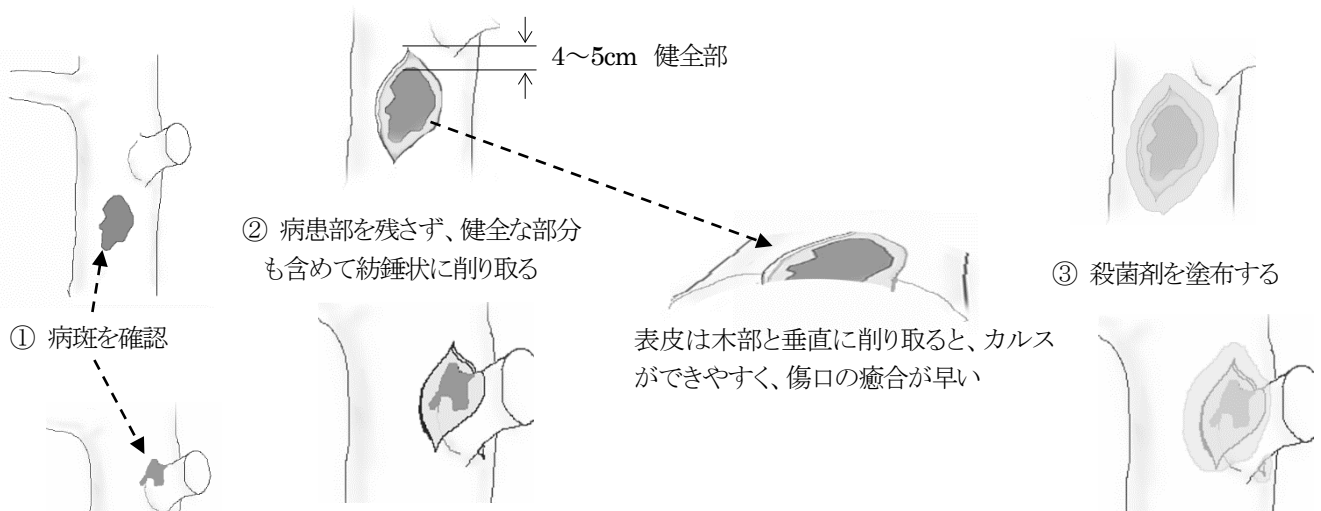


図2 腐らん病の処置 (通常の方法)

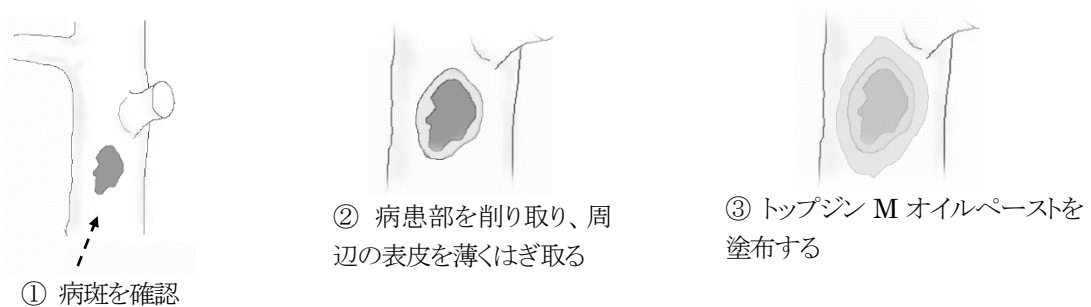


図3 腐らん病の処置 (省力的な方法)

トップジンMオイルペーストは浸透性が強いので削り取りの作業時間を3~4割短縮できる。

※ トップジンMオイルペーストは、胴腐らの処置にのみ利用する。

りんご害虫

1 予報（3～4月）の内容

病虫害名	発生時期	発生量 ・ 感染量	予 報 の 根 拠
ハマキムシ類	並	少	(1) 4月の気温は、ほぼ平年並の予報。 (2) 前年の発生園地率は、平年より低かった。(－)
リンゴハダニ	越冬卵 ふ化時期 並	やや少	(1) 4月の気温は、ほぼ平年並の予報。 (2) 前年秋期の発生園地率は、平年よりやや低かった。(－)
キンモンホソガ	越冬世代 羽化時期 並	やや多	(1) 4月の気温は、ほぼ平年並の予報。 (2) 前年秋期の発生園地率は、平年より高かった。(＋)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【ハマキムシ類・リンゴクビレアブラムシ】

(1) 展葉3日後の防除薬剤は、有機リン剤を使用する。

【リンゴハダニ】

- (1) 剪定時等に枝の分岐部等を注意して観察し、越冬卵が確認された園地では、展葉3日後までにマシン油乳剤で防除を行う。特に、近年発生の多い園地では、芽出前～芽出当時の防除に努める。
- (2) マシン油乳剤を散布する場合は、風の弱い日にムラが出ないようにゆっくり丁寧に十分量を散布する。



図 リンゴハダニの越冬卵

【キンモンホソガ】

(1) 越冬は被害落葉の中で行われるので、前年秋期に多発した園地では、羽化前（りんごの芽出前）までに園地内の清掃に努める。

【ナシマルカイガラムシ】

- (1) 発生がみられた場合は、芽出前にマシン油乳剤を使用する。
- (2) 前年、ナシマルカイガラムシの被害があり、芽出前にマシン油乳剤の散布ができなかった場合は、展葉3日後にアプロードフロアブルを散布する。